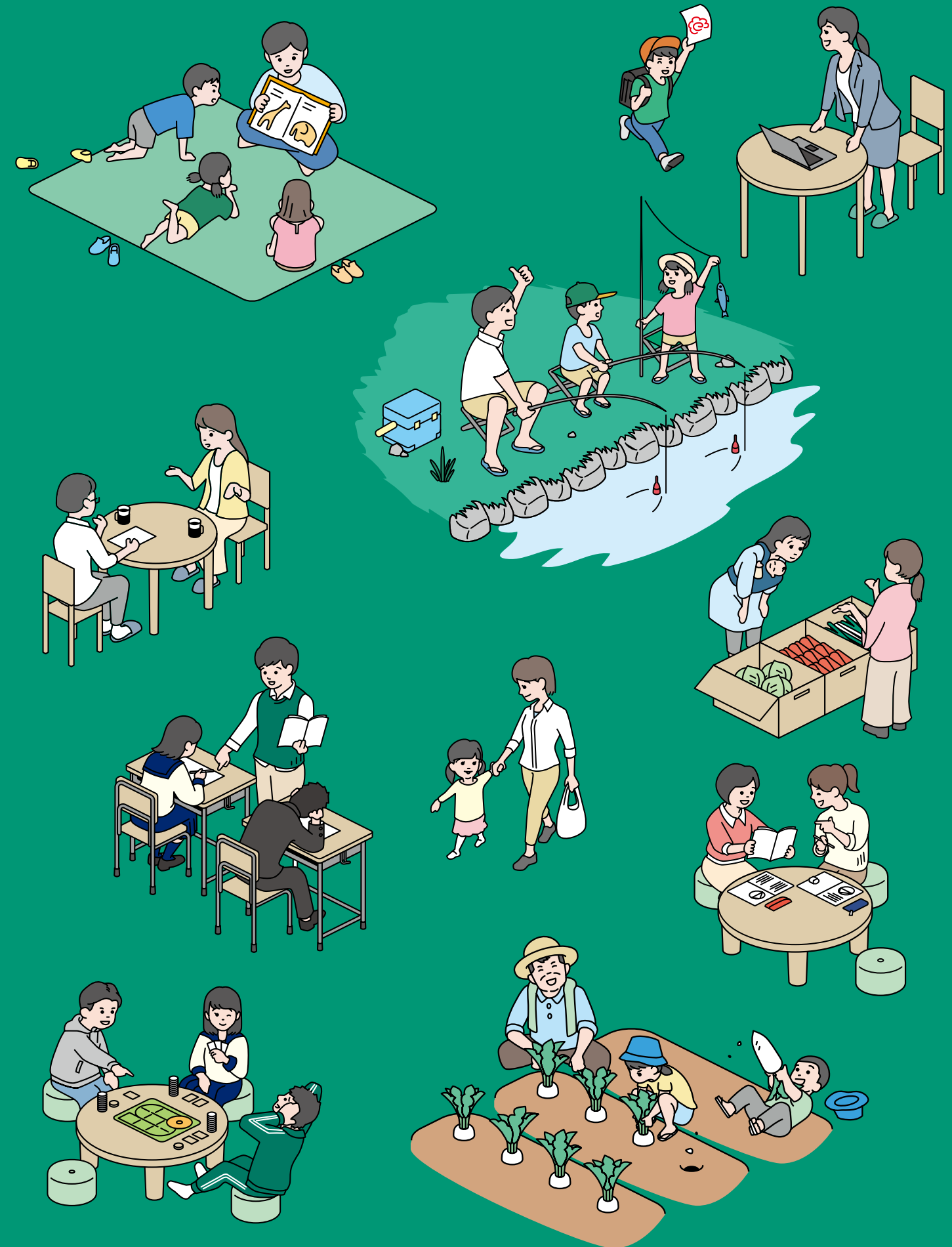




特定非営利活動法人 Learning for All

〒160-0022 東京都新宿区新宿五丁目1番1号ローヤルマンションビル404号室
TEL 03-5357-7131（受付時間：平日10時～17時）

ご寄付のご案内

1. WEBサイトから寄付をする

<https://learningforall.or.jp/support/>

右記WEBサイトから寄付を受け付けています。
「LFA 寄付」でも検索可能です。

LFA 寄付

検索



2. 銀行振込みで寄付をする

右記の口座までお振込みください。

〔銀行名〕 三菱UFJ銀行

〔支店名〕 新宿支店

〔種類〕 普通

〔口座番号〕 0577222

〔名義人〕 特定非営利活動法人 Learning for All

カナ：トクヒ）ラーニングフォーオール

1 代表メッセージ

2 ビジョン/ミッション

4 3つのアプローチ

6 2021年のハイライト

事業内容

1 | 一人に寄り添う

8 居場所づくり事業

10 食事支援

11 訪問支援 | 保護者支援

12 学習支援

14 子どもたちの変化

16 できるようになりたいな

2 | 仕組みを広げる

18 ナレッジ展開

3 | 社会を動かす

20 普及啓発/アドボカシー

21 メディア発信 | 人材育成

LFA 座談会

22 LFA 代表 李 炯植
× さいたまユースサポートネット代表 青砥 恭氏
『子ども支援の未来を描く』

24 SUPPORTERS

26 収支報告

27 団体概要

28 応援のしかた

代表メッセージ

日頃よりあたたかいご支援をいただき、誠にありがとうございます。

2021年度は、コロナ禍の長期化による子どもたちへの影響が顕著にあらわれた1年でした。子どもの虐待・不登校・自殺は、過去最悪の数字を更新し、子どもたちの日常からは、安心安全な居場所や、様々な学び・体験が失われてしまっています。私たちの支援現場でも、虐待を受ける子どもが例年より増加し、虐待予防や事後対応に奔走しました。支援にあたるスタッフのケアにもより一層努め、総力をあげて子どもたちの生活を守る1年になりました。

そんな中Learning for All（以下、LFA）では、地域の子ども・保護者のニーズに沿って「地域協働型子ども包括支援」を行い、子どもたちに寄り添ったサポートを続けました。従来から取り組んでいる学習支援や居場所づくりに加え、地域のボランティアの皆様と協力したフードパントリーの開催や、専門職による訪問支援・個別支援・虐待対応など、より一人ひとりの子どもたちに深く向き合い、支える活動を本格化させています。

私の故郷であり、原点である兵庫県尼崎市への拠点展開も決定し、2022年度からは関西でも、「地域協働型子ども包括支援」を推進できることとなりました。

さらに、LFA直営の地域での支援活動にとどまらず、日本全体に「地域協働型子ども包括支援」を展開するため、全国の子ども支援団体や自治体との連携を強め、『こども支援ナビ』や「ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金」を創設。全国の子ども支援団体のサポートも開始いたしました。

そして、「子どもの貧困に、本質的な解決を。」というミッションを実現するため、多くの政策提言活動も行い、政策づくりにも寄与した1年でした。おかげさまでこのように、困難な状況の中でも、2021年度はLFAにとって飛躍の年になったと言えます。

私たちがこうして子どもたちの支援を続けることができるのは、ひとえに日頃から応援いただいている皆さまのおかげです。心より、感謝申し上げます。

皆さまからの応援なくしては、この広範にわたる活動を持続することは不可能です。どうぞこれからも「子どもの貧困」を解決する「仲間」として、LFAと共に歩んでいただけますと幸いです。

さて、本年から子どもたちの日常を身近に感じてもらえるよう、年次報告書の構成や仕様をリニューアルいたしました。困難に直面している子どもたちですが、我々と接する中で屈託のない笑顔を見せてくれたり、持って生まれた才能を絵で表現したりと、笑いの絶えない時間もあり、現場には希望も満ちています。そうした子どもたちの姿や現場で働く職員たちのことをより知っていただけるよう、彼らの日常を盛り込んだ内容にいたしました。また、こうした子どもたちがいること、その子どもたちを支えるLFAという団体があることを、是非皆さまの周りの方にもご紹介ください。

「子どもの貧困問題を解決したい」という一人ひとりの「意志」の結集こそ、LFAの力です。引き続き、私たちに皆さまの「意志の力」を託してください。

NPO法人 Learning for All 代表理事
李炯植





すべての子どもたちが
自分の可能性を信じ、

自分の力で人生を
切り拓くことのできる
社会を目指して

MISSION

子どもの貧困に、本質的解決を。

貧困、虐待、発達障害、いじめ、社会的マイノリティなど、
生きづらさを抱える子どもたち。

「安心」を奪われている。

「努力を信じられる環境」を奪われている。

「自分自身の可能性に気づく機会」を奪われている。

そこでは、諦めが日常化してしまっています。

2010年、学習支援からスタートした私たち Learning for All は、
現場の経験から、この問題を解決するには

「学び」を支えるだけでは足りないと確信するに至りました。

現在では、一人の子どもが自立するまで、

地域で連携して幅広くサポートできるモデルを構築。

全国へ広げるとともに、法・制度を変え、

子どものあらゆる「貧」と「困」をなくす社会をつくろうとしています。

VALUES

Children First …………… 「子ども主語」で考えつづける

Change for All …………… 本質的解決のために変わりつづける

Inspire for All …………… 関わる人ぜんぶに学びの機会をつくる

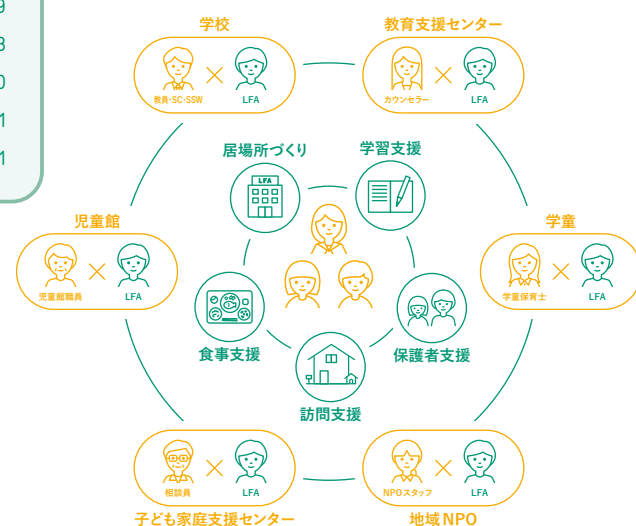
Collaborate for All …… つながって、いっしょに創る

3つのアプローチ

今日の前にいる子どもに、どこまでも寄り添うこと。
 社会の仕組みそのものを、本気で変えていくこと。
 そのどちらが欠けても未来はつukれない。
 私たちは、志を同じくする全ての人たちと力をひとつにし、
 3つのアプローチで課題の
 本質的解決を目指しています。

アプローチ 一人に 寄り添う

居場所づくり	8-9
学習支援	12-13
食事支援	10
訪問支援	11
保護者支援	11



地域の大人の
支援ネットワークづくり



子どもたちへの
包括的な支援提供

地域協働型子ども包括支援

地域のあらゆる立場の大人たちのネットワ
ークをつくり、支援の必要な子どもを見逃
さず、早期につながる。成長段階に合わせ、
必要なサポートを6～18歳まで切れ目なく
行う。私たちは、そんな「地域協働型子ど
も包括支援」を展開しています。

LFAの提供する支援メニュー

6～18歳の子どもの状況に合わせ、幅広い支
援内容を柔軟に展開しています。

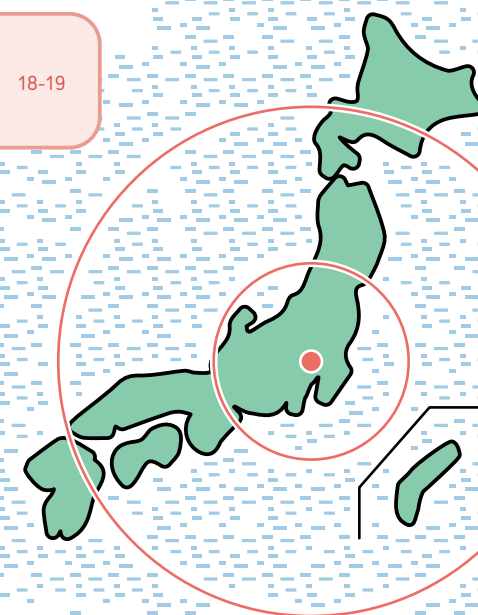
2021年度LFA直営拠点数

都・県	市・区	拠点数
東京都	葛飾区	20
	板橋区	6
埼玉県	戸田市	5
茨城県	つくば市	5



アプローチ 仕組みを 広げる

ナレッジ展開 18-19

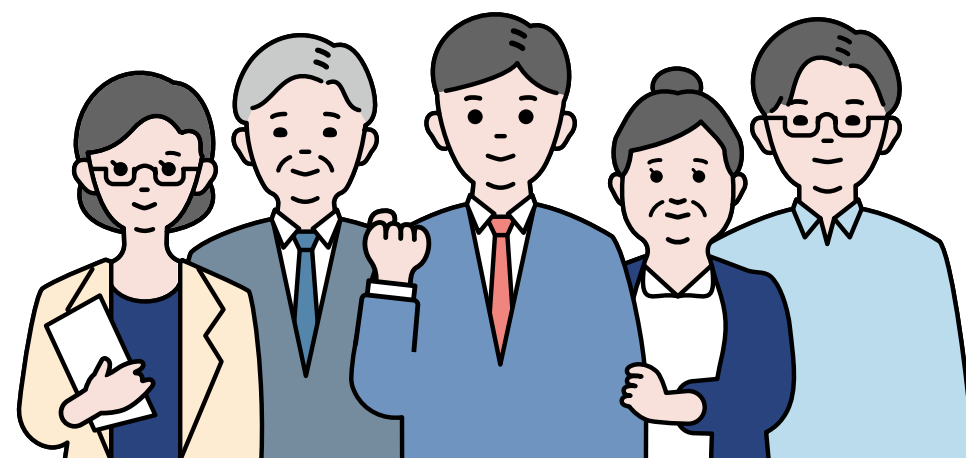


現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体
の努力にもかかわらず、支援の「量」「質」ともに
まだ足りていないのが現実です。
 LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援の
ノウハウを、全国の子ども支援団体や企業に
提供。日本中の子ども支援者がつながるネット
ワークづくりにも取り組むことで、「地域協働型
子ども包括支援」の全国展開を推進しています。

普及啓発/アドボカシー	20
メディア発信	21
人材育成	21

アプローチ 社会を 動かす

目の前の子どもにどこまでも寄り添う。その
重要さは疑う余地がない一方で、問題を真に
解決するためには世論の形成や、社会の
仕組みを変えていく必要があります。
 LFA は現場での支援活動や、全国の子ども
支援団体とのネットワークづくりを通して、
課題の普及啓発・人材育成・政策提言に取り
組んでいます。



2021年の 活動ハイライト

1

くわしくはp.8へ→

1. 一人に寄り添う 年971名※の子どもたちを 居場所・学習支援 ・訪問支援等で直接サポート

※2021年度 実数

2021年度は、居場所づくり・学習支援・食事支援などの従来からの活動に加え、拠点に通えない子どもへの訪問支援や、他の生徒と同じ教室に通えない別室登校の子どもたちへの支援にも力を入れました。



1. 一人に寄り添う

LFAの直営支援拠点が関西に進出。 兵庫県尼崎市にて、 地域協働型子ども包括支援の推進が決定

これまで葛飾、板橋、戸田、つくばで実践を行っていた「地域協働型子ども包括支援」ですが、関西ではじめて、導入が決定。

尼崎市は代表李の出身でもあり、今後は、尼崎市にLFA直営の子ども支援拠点を開設し、モデルづくりに取り組んで参ります。

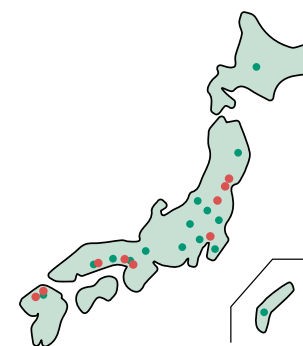
2

3

2. 仕組みを広げる 子ども支援者のための 専門ポータル『こども支援ナビ』 年間 24,961人が利用

くわしくはp.18へ→

- ・年間ナレッジ提供数：97ナレッジ
- ・年間UU：24,961人 PV：64,228人
- ・ナレッジシェアイベント参加者：576人
(計7回/のべ参加者数)



- 全国9団体に助成を実施
- のべ17団体77名に研修を実施

2. 仕組みを広げる

全国の子ども支援団体を エンパワメントする基金を立ち上げ。 9つの子ども支援団体に助成が決定し、研修を実施

全国の子ども支援団体をサポートするため、ゴールドマン・サックス、パブリックリソース財団の協力を得て「ゴールドマン・サックス地域協働型子ども包括支援基金」を発足。

資金面だけでなく、LFAによる研修や伴走支援などの非資金面でもサポートをする助成プログラムとなり、初年度となる2021年度は9団体へ総額約3,300万円の助成が決定。LFAではのべ17団体77名への研修を行いました。

くわしくはp.19へ→

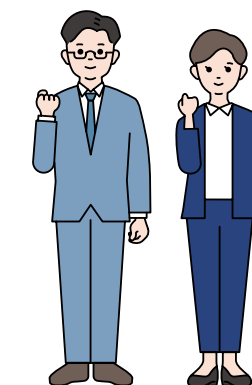
4

5

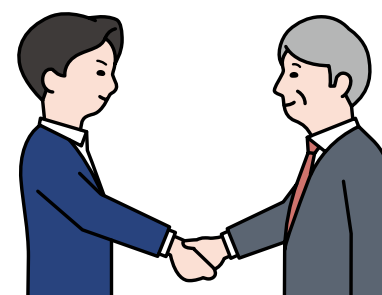
3. 社会を動かす

東京大学との教育・研究交流連携事業を開始

東京大学大学院教育学研究科とLFAは、2021年10月、教育・研究交流連携事業に関する協定を締結。今後、東京大学の学部生、大学院生がLFAで学習支援や調査・政策立案の活動に従事することで知見を深めていくことや、子どもの貧困や格差の解消へ向けての共同研究を推進していくこと等が予定されています。



くわしくはp.20へ→



3. 社会を動かす

LFAの提言が、子ども支援政策に大きく反映

代表李が、内閣府子ども政策の推進に係る有識者会議の臨時委員に就任。

子ども支援におけるデータベース構築、アウトリーチ強化、居場所づくりに関する提言活動を行い、事業化や制度化に結びつきました。

6

居場所づくり事業

小学生～高校生世代（6～18歳まで）の子どもたちに、安心して過ごせる居場所を提供する事業です。その子の個性や保護者さまの状況に合わせた個別の支援計画を立て、一人ひとりに寄り添った支援をおこなっています。



小学生の居場所

生活習慣の学び直しや遊び・学習サポートとして、学童保育のような形で週5日運営



中高生の居場所

不登校や家庭・学校に居場所がない子どもを対象に週3日運営

支援した子どもの数：63人 ※2021年度実数

～子どもたちの声に耳を傾けて～

2021年は2020年に引き続き、緊急事態宣言が繰り返され発動される一年でした。そんな中でも感染対策を行いながら、それぞれの拠点ごとに子どもたちの声に耳を傾け、子どもたち発の企画や、大学生ボランティア発の企画など、さまざまな体験学習を積極的に行いました。

子どもの声



私はこれまで家や学校であつた辛かったことを誰にも話せず、一人で抱え込んでいました。LFAのスタッフが親身に話を聞いてくれたり、一緒に遊んでくれることで前を向けるようになりました。私にとっての大切な居場所です。（高3女子）

春

外で思いきり遊んだよ！

学生スタッフが企画をして、紙飛行機づくりやカタキというゲームを行いました。どうしたらもっと飛距離が出るかな？子どもたちなりに一生懸命工夫したり、作戦会議をしたり。チームで協力し合って楽しみました。



水鉄砲大会！

子どもたちの一言から、水鉄砲大会の企画がスタート！ペットボトルで水鉄砲を作成するところから始めて、チームに分かれていざ勝負！点数に関係なくお互いを称え合う姿に、子どもたちの成長を感じる一幕でした。

夏



秋

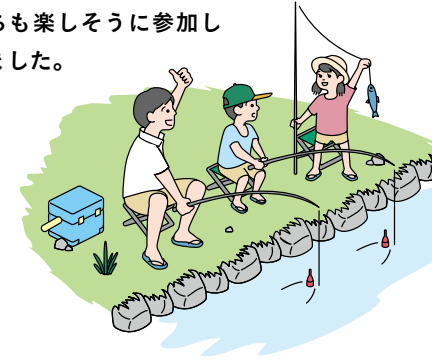
色んな画材でアート作品づくり



アートが好きな中学生の男の子の発案で、みんなでアート作品をつくるイベントを開催！絵具、ボスカ、鉛筆など、色々な画材を使用。タイトルは「夢がつまっている」子どもたちのパワーが伝わってくる、色彩豊かな作品に仕上がりました！

釣り堀でマス釣り♪

山の釣り堀でマス釣りをして、その場で焼いて食べる体験学習を開催！最初は釣れずに苦戦していた子どもたちも、徐々にコツをつかんで最後は27匹も釣れました。初めての経験ばかり、子どもたちも楽しそうに参加していました。



子ども支援事業部 安次富 亮伍

平素よりたくさんのご寄付やサポートいただき、誠にありがとうございます。LFAの居場所拠点では、昨年度から続くコロナ禍の中で、感染予防を徹底しながら運営してまいりました。居場所では支援の特性上どうしても密になりがちですが、パーティーの設置や、配置や備品の工夫などで密や接触を最小限にしながら、居場所

所の良さを保つ工夫をしながら支援を継続しました。また感染予防によって居場所内が閉鎖的な雰囲気にならないように、明るい安心できる場とすることを意識し、可能な限り多くのプログラムにもチャレンジしました。その中でも特に印象的だったのが、攻撃的な言動が絶えなかった児童が、拠点で皆と楽しい場を作りたいと企

～地域の方とともに～

LFAでは「地域協働型子ども包括支援」の実現に向けて、地域のボランティアの方々と交流を大切にしています。今年度も、一緒に作品をつくりたり畑を耕すなど、さまざまな分野で子どもたちの活動を支援いただきました。



畑プロジェクト

畑の開墾からはじめて、キャベツやほうれん草をつかって食べました♪



染物体験

地域の団体の方を講師に、染物に挑戦しました！



冬

手作りのクリスマス会で、みんなにハッピーを



「みんなにハッピーを届けるクリスマス会」をテーマに、手作りのクリスマス会を開催！粘土制作・ハンカチ落とし・クリスマスプレゼント交換など、子ども会議で企画を考案。自分の係に責任をもって取り組む姿が印象的でした。

僕はアートにとっても関心があり、なにかやりたいと思っていました。LFAスタッフに話をしたところ「一緒にイベントを実現してみよう！」と背中を押してくれ、参加型のアートイベントを開催しました。自分が好きなアートを通じて、話すことが無かった子どもたちともコミュニケーションをとることができ嬉しかったです。（中2男子）

子どもの声



画した「お泊まり会イベント」です。普段はケンカが絶えない子ども同士でもイベントに楽しんで参加し、BBQや夜の恋愛トークを楽しんでいました。イベントを通じて普段関わることのない子ども間でも多くの交流、友情が生まれ、子どもたちにとってもスタッフにとっても思い出に残る会になりました。

食事支援

子どもたちの健やかな育ちには、栄養のある食事がかせません。経済的に困難を抱えていたり、仕事で忙しい保護者の方に代わり、子ども食堂の他、フードパントリーや食料品の配送まで、様々な方法で子どもたちの「食」を支援しています。

食事支援の累計食数：2643食



コロナ禍で開始した「フードパントリー」を継続開催

子ども支援拠点で地域の子育て家庭に食料配布するフードパントリー。運営を通して、子どもたちが地域の方との交流も深めるきっかけにもなりました。



参加者の声



「栄養満点でボリュームもあるお弁当を用意いただき子どもも喜んでます。」



「親が帰ってくるのが遅いから、ご飯をもらえるのはうれしい」



「夏休みは家にいることも多く、ストレスが溜まる日々だったので、フードパントリーが始まってうれしい」

栄養バランスの取れたお弁当を配布し、勉強もサポートする「お弁当付き勉強会」の活動を実施

コロナ禍で子ども食堂に来たり、飲食を共にすることが難しくなった子どもたちのために、市販のお弁当を購入・配布する、お弁当付きの勉強会を実施しました。

4月から12月までの9か月間で計46回*行い、のべ392名の子どもたちが参加し、学習と食事の支援を受けました。また、兄弟姉妹用の持ち帰り弁当333食を含め、のべ723食の食事を提供することができました。

※同日に、午前、午後別の場所で開催した場合は、2回と数えています。



訪問支援

訪問支援回数：87回実施

2021年度は、家庭に訪問して子どもたちを個別に支援する「訪問支援」の取り組みを強化しました。

さまざまな理由で拠点に直接通うことが難しい子どもたちのために、個別のニーズに合わせて、話し相手として近況や悩みを聞いたり、一緒に遊んだりすることで、子どもたちが安心して社会に踏み出せるよう、丁寧に伴走支援を行なっています。



保護者支援

保護者向け情報発信回数：2992回



子どもたちを支えるためには、保護者の方のサポートも欠かせません。LINEやメール、電話、対面と様々な手段を活用し、日々の悩み相談だけでなく、支援制度の紹介・窓口への繋ぎ等も対応。保護者さま同士の繋がり作りとして、保護者会等も実施しています。

保護者支援のエピソード

子どもの生活習慣が乱れて困っていたAさんのエピソードを紹介します。Aさんの子どもは、タブレットで動画を視聴したり、動画投稿サイトに自分の動画をあげたりして、夜中12時ぐらいまで起きていました。夜更かしで朝起きられず、学校にも遅刻してしまいます。Aさんは「寝かしつけるのも起こすのも大変」とお話されていました。

私たちは生活習慣の乱れ以外にも、タブレットの使用方法や、顔が写った動画の公開によるリスクも課題として捉え、以下のような取組を行いました。

- ・Aさんと相談し、タブレットの使用時間や家庭内の約束を見直す
- ・個人情報悪用のリスクをAさん・子ども・スタッフで一緒に考える
- ・使用時間設定機能をAさんとスタッフで設定する
- ・その後の様子を聞き取る

そのような関わりを通じて、子どものタブレット使用時間は減り、生活リズムの乱れも一旦収まりました。朝のドタバタがなくなってAさんの負担も減ったようでした。また、使用時間設定機能を活用して、タブレットを使えない仕組みができたことで、Aさんが子どもを注意することも減りました。

学習支援

小学4年生～高校生世代（9～18歳まで）の子どもたちを対象に、地域や学校と協力して無償の「学習支援拠点」を運営しています。質の高さと継続性にこだわり、独自の研修を受けた大学生ボランティアが教師となって、日々の学習に課題を抱えた子どもたちに寄り添って勉強を教えています。

支援した子どもの数：212人 ※2021年度実数

学校内学習支援

1対2～3の担任制の指導で、週1回×3か月のプログラムを年4回実施。



公民館学習支援

不登校や、日本語に慣れていないなど、学校での個別対応が難しい子を対象に週2回の1対1の個別指導を実施



2021年度は、通常行っている学校内学習支援・公民館学習支援のほかに、学習の遅れや不登校などによって「別室登校*」をしている子どもたちを対象にした学習支援など、従来よりも1対1での支援を本格的に行いました。

*別室登校とは？
学習に大きな遅れがある子や、不登校の子どもが、他の生徒のいる教室とは別の教室や保健室等で過ごしたり、授業を受けること。

通常クラスでの支援



- ・ 学習の遅れの解消を目的とした1対2～3の担任制の指導。
- ・ 週1回×3か月のプログラムを年4回実施。
- ・ 主に大学生スタッフが対応。

「別室登校」の子どもたちへの個別支援

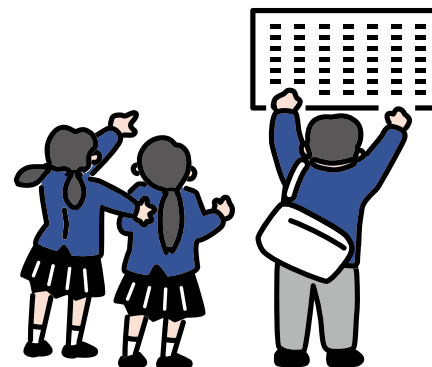


- ・ 学習の遅れの解消を目的としつつも、不登校の子の居場所的な役割も。給食も一緒に食べる。
- ・ 週1～2回/1日3～5時間実施
- ・ 主にLFA職員が対応。

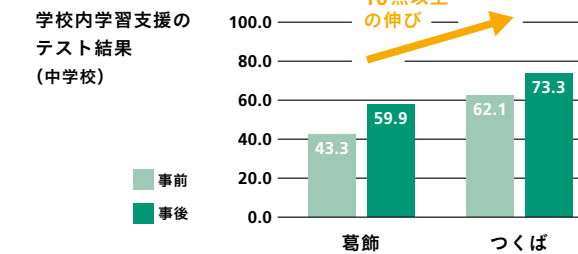
2021年度 子どもたちの成長と進路

子どもたちが将来の選択肢を増やし、描いた夢を叶えられるように。

学力テストの結果では、平均10点以上の伸びを達成。全員が希望の進路に進むことができました。



子どもたちの成績の変化



子どもたちの進路

葛飾	10名中10名が高校合格。1名中1名が大学進学。
つくば	4名中4名が高校合格。
戸田	3名中3名が高校合格。



大学生スタッフ
田中 未来 さん

担当していた当時、中学2年生の女の子。とてもコミュニケーション力が高く、初めて会った時から、進んで自分を話の輪に入れてくれたり、その子が好きなものをたくさん紹介してくれました。しかし、学習が遅れているということを実感しており、学習に対しての抵抗感が強く自己肯定感が低かつ

たんです。どうして勉強に集中できないのかわからずに困っていた時、その子にとって人に頼ることがどれほど難しいことなのかということなどについて語ってくれました。その子が発する言葉が実はSOSだったことに気づいた時、小さな言動からその子自身が何を私たちに求めているのかを考えることの大切さを理解しました。



子ども支援事業部
木村 駿

いじめや、外国から来たばかりで日本語がわからない、などはっきりとした理由で教室に入れない子どももいれば、よくわからないけど教室に入りづらくなり、だんだん通わなくなった子どももいます。どの子どもも、教室の空間や「当たり前」の学校生活に

あるお子さんは、養護施設から通ってきている子でした。こういった背景で別室登校になったかはわかりませんが、集団授業は参加しづらく、自分一人で別教室で黙々と勉強していました。その子の好きな推理小説や魚の話をしながら将来何をしたいのかを一緒に深め、高校入試の作文対策をしました。最初は1つの作文を書くのに何日もかかりましたが、その子のペースで進め、最終的には試験時間内で十分書き切ることができるよう

LFAでの活動を通じて、母子家庭で育っていること、外国にルーツを持っていること、自分で家事を行っていることなど、困難を抱える子どもには様々な背景があるのだと知りました。また、目に見えやすい貧困だけではなく、目には見えづらい貧困がありました。一見すると元気そうでも心の中にあるもやもやを家では吐き出すことができないという状況が、子どもとの関わりを通じて感じた子どもの貧困でした。

になり、無事合格できました。その時、改めて、その子らしい部分を見つけ、その子のペースで進むことが大事だと感じました。2022年度は、子どもが自分らしくいることができる居場所づくりに力を入れ、子どもが自分の挑戦したいことに取り組み自立していく力をつけていってもらおう場所とすること、そのために学校としっかり連携することに力を入れています。

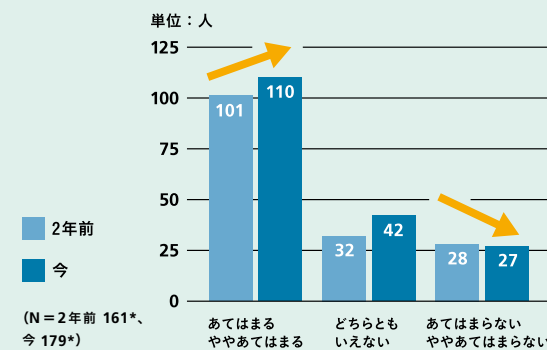
子どもたちの変化

子どもたちの抱えている課題は複雑で、すぐに全てが解決できる訳ではありません。
私たちは時間をかけて、まずは子どもたちが安心して過ごせる環境をつくり、
一人ひとりが自分から一歩を踏み出せるように、粘り強く寄り添うことを続けています。
そんな中でも、日々の活動の中で見えてくる支援の成果の一部をご紹介します。

1

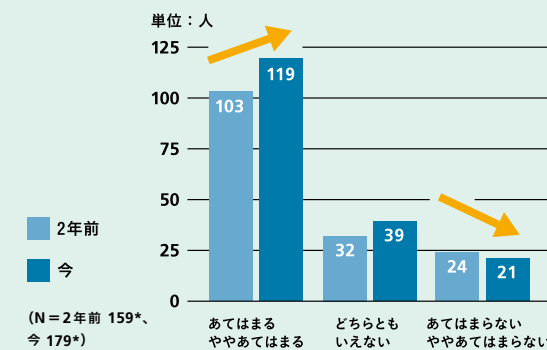
2年前と比べて、周囲の人から大切にされていると感じる子どもが増えています。

「自分は周りの人から公平にあつかわれている」と感じる子どもが増えています。



設問 「自分は周りの人から、公平にあつかわれている」

「自分のことをかけがえのない存在として大切にしてくれる人がある」と感じる子どもが増えています。

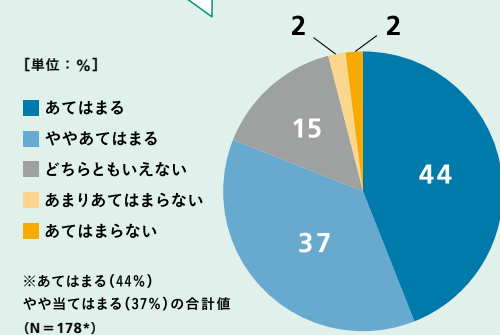


設問 「自分のことをかけがえのない存在として、大切にしてくれる人があると感じる」

2

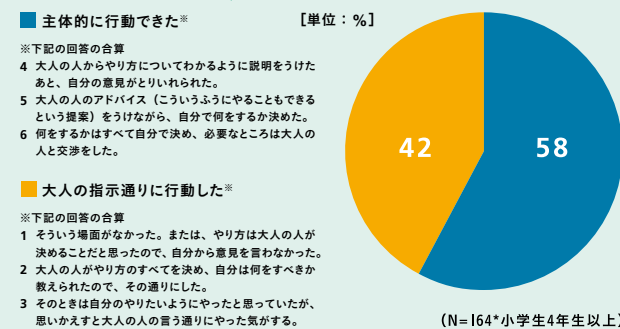
半数以上の子どもが拠点で自ら意見を言えたり、主体的に行動できる機会があると回答しています。

約8割*の子どもが、拠点の中で自らの意見を出し、対話する機会があると答えています。



設問 「(拠点) では、あなたの意見を言えたり、あなたのわからないことを発言して話しあう機会がある」

約6割*の子どもが、大人との関係の中で自ら主体的に行動する場面*があったと感じています。

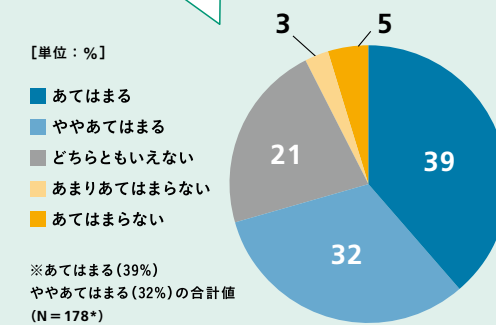


設問 「自分が何かしようと行動したときに、助けてくれた大人の人を思い出してください。その人との関係に、もっともちかいものはどれですか？1つえらんで教えてください。」

3

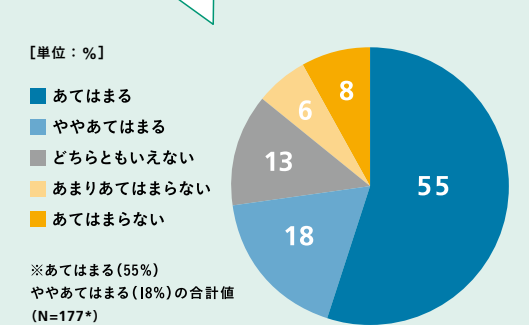
中退・不登校・学習の遅れなど、学びのハンデを抱えていた子どもたちも、学習面での良い変化を感じたり、将来やりたいことや夢を描いています。

約7割*の子どもが、LFAの拠点は学習や将来に対して良い変化を与えたと感じています。



設問 「(拠点) は、あなたの学習や将来に良い変化をあたえた」

将来やりたいことや夢がある子どもは、約7割*となっています。

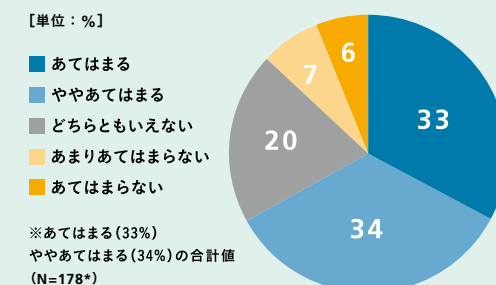


設問 「将来やりたいことや夢がある」

4

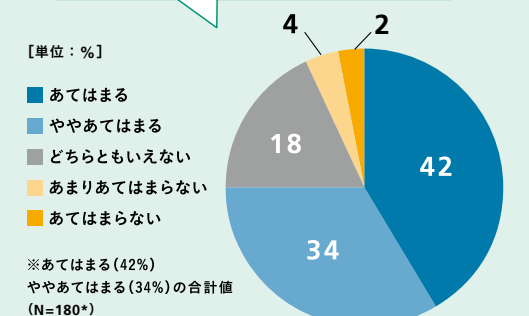
困難な状況にも関わらず、多くの子どもたちが社会の役に立ちたい、困っている人を助けたいと思っています。

約7割*の子どもが、社会の役に立つことがしたいという気持ちを持っています。



設問 「社会のために役にたつことをしたいと思う」

約7割*の子どもが、困っている人がいたら、手助けをしたいと考えています。



設問 「困っている人がいたら、てだすけをする」

出典：Learning for All 地域協働型子ども包括支援事業評価2021

「子どもの声」を聴き、社会に示していく

2022年より正式に発足した「LFAラボ」では、大人目線で見えてこの支援が良いと決めるのではなく、「子ども自身が感じている価値」を大切に、効果的な支援の在り方を検証しています。また、私たちが目指す「地域協働型子ども包括支援」は、一つの組織だけでは完結しません。そのため、組織の枠を超えて、「地域の中で子どもに寄り添う」とはどういうことなのかを客観的に確かめ、社会に示していくことが必要だと考えています。

今年度の事業評価レポートもそうした考えから、子どもや保護者へのアンケートを中心に分析や考察を行い、作成をしま

した。今回の調査では子ども、保護者のニーズ、何が子どもの変化に繋がっているのか、子ども・保護者の実感は伴っているのかということについて客観的に可視化をすることができました。可視化されたものを元に現場での日々の実践と照らしながら、支援の本質について議論を継続していく予定です。今後も、何が子どもたちの将来につながるか、「本質的な解決」なのかを子どもたちから学び、社会に発信していきたいと思ひます。

LFA ラボ
評価政策提言チーム



宇地原 崇斗



佃 真衣

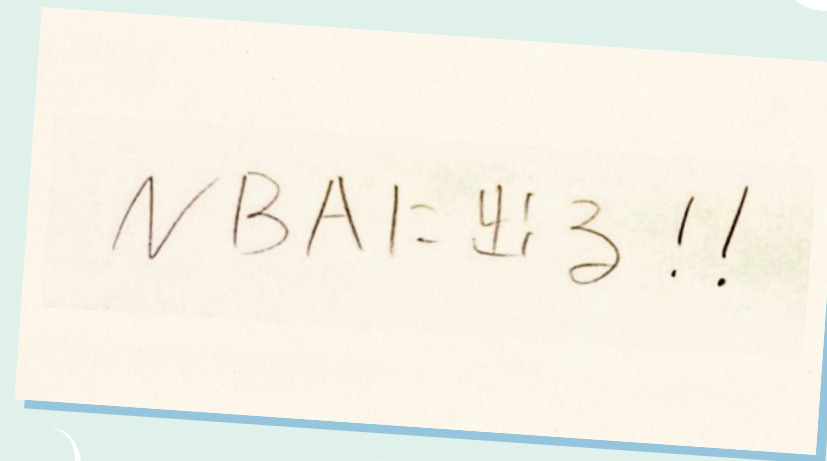
できるように なりたいな

LFAの「居場所拠点」に通う子どもたちの、
今年の「できるようになりたいこと」
を集めました。



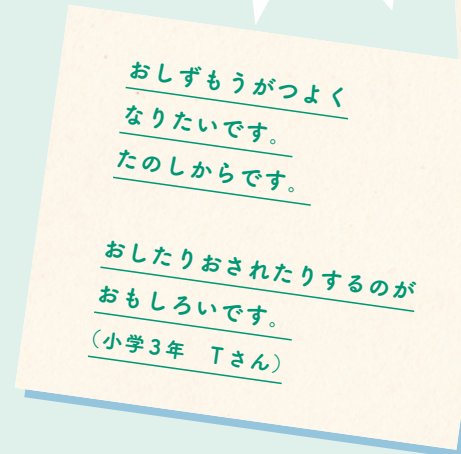
ぼくは、やさしく
してあかる
3ねんせい
でいたい
です。その
てをかんばり
たいです。

ぼくは、やさしくてあかるい
3ねんせいでいたいです。
そのことをかんばりたいです。
(小学3年 Aさん)



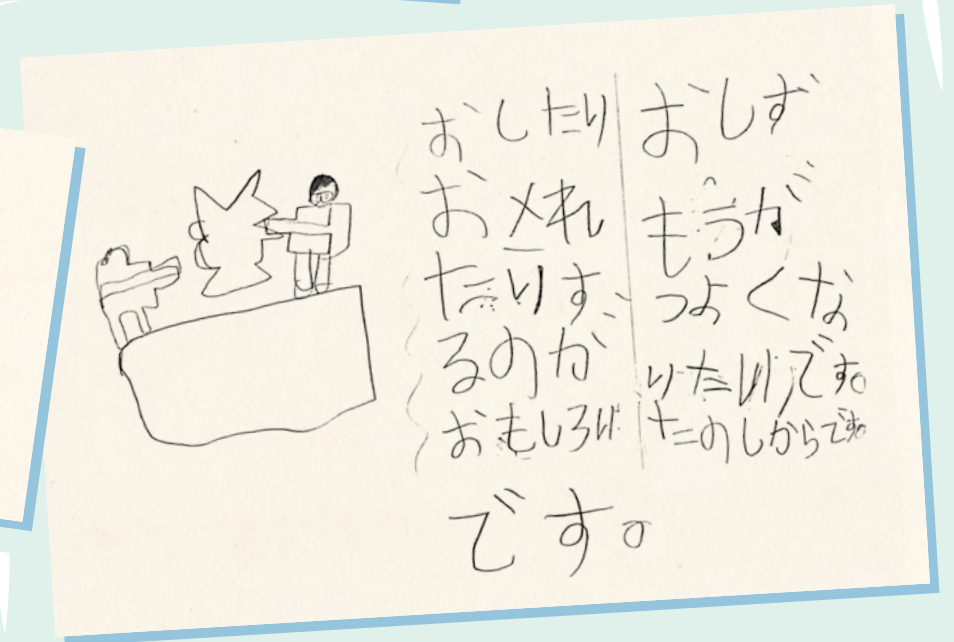
NBAに出る!!

NBAに出る!!
(高校3年 Sさん)

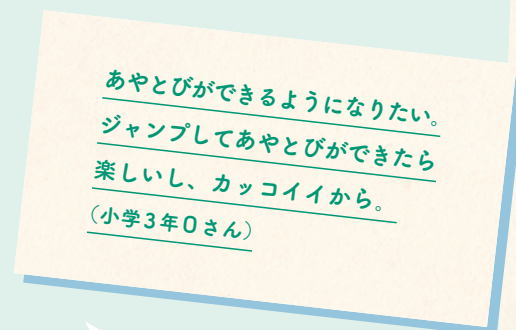


おしずもうがつよく
なりたいです。
たのしからです。

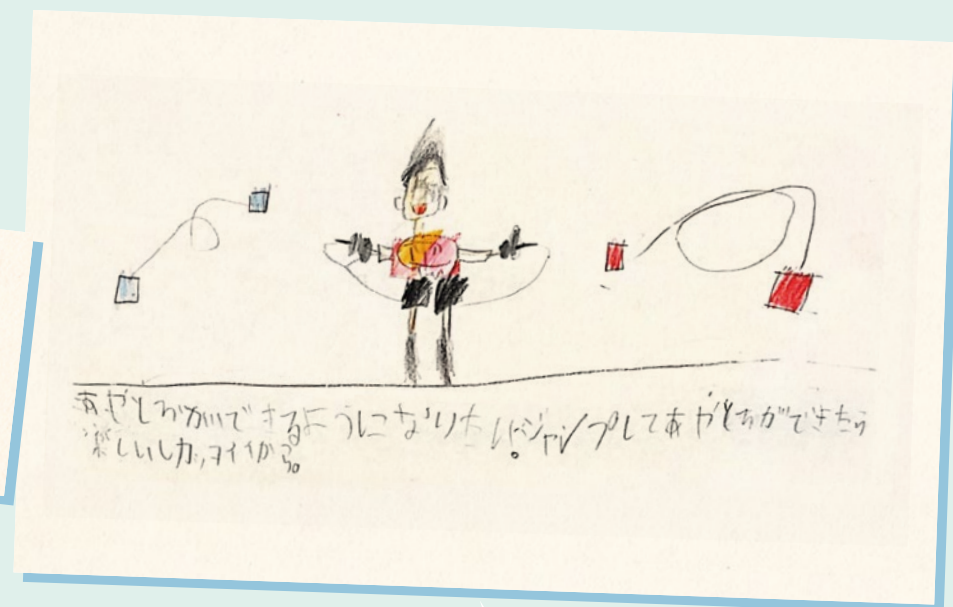
おしたりおされたりするのが
おもしろいです。
(小学3年 Tさん)



おしたりおされたり
おもしろいです。
たのしからです。
おもしろいです。
たのしからです。
おもしろいです。
たのしからです。



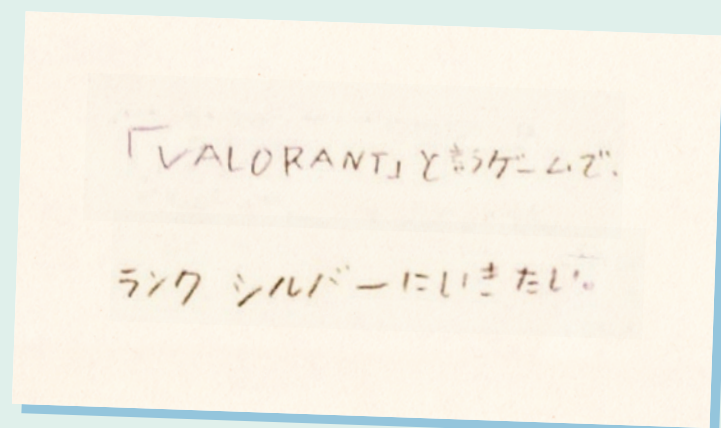
あやとびができるようになりたい。
ジャンプしてあやとびができたら
楽しいし、カッコイイから。
(小学3年 Oさん)



あやとびができるようになりたい。
ジャンプしてあやとびができたら
楽しいし、カッコイイから。

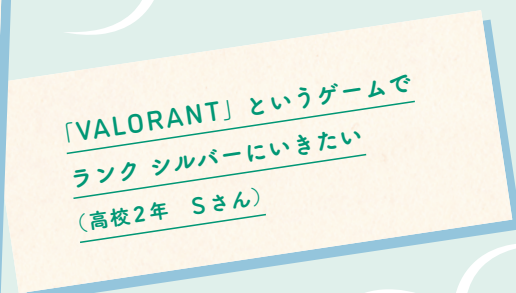


(中学1年 Yさん)



「VALORANT」というゲームで、

ランク シルバーにいきたい。



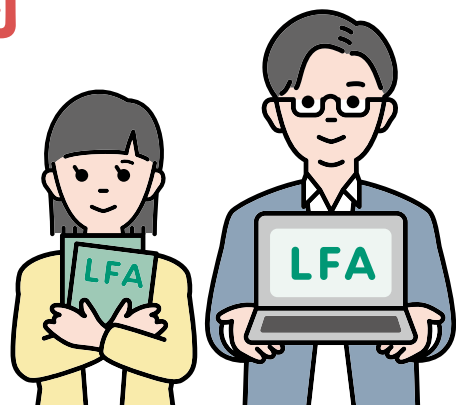
「VALORANT」というゲームで
ランク シルバーにいきたい
(高校2年 Sさん)

子どもたちの願いが叶うように、
ぜひ応援よろしくお願いします!

ナレッジ展開

現在の日本では、子ども支援に関わる人・団体の努力にもかかわらず、支援の「量」「質」とともにまだ足りていないのが現実です。

LFAでは、これまで培ってきた実践的な支援のノウハウを全国各地の子ども支援団体や企業に提供。同じ志を持つ子ども支援者がつながるネットワークづくりにも取り組むことで、「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を推進しています。



子ども支援者向け情報プラットフォーム『こども支援ナビ』

子どもたちの抱えている複雑な課題に対し、一つの専門性だけで対応できないのが子ども支援。

LFAでは2021年5月より、全国の子ども支援者がノウハウを共有し、支え合えるオンラインプラットフォーム『こども支援ナビ』を開設。

年間100近いナレッジ記事を公開し、イベントを通して多くの子ども支援者の皆様とつながりました。

『こども支援ナビ』記事テーマ例

- ・不登校の子どもとの接し方
- ・発達障害の子どもとの接し方
- ・活用できる助成金の事例
- ・支援疲れへの対処法

・年間ナレッジ提供数：97ナレッジ
・年間UU：24,961人 PV：64,228人
・ナレッジシェアイベント参加者：576人
(計7回/のべ参加者数)

利用者の声



子ども支援に特化したサイトはほとんど見たことがなく、非常に心強い存在です。



立ち上げ当初の団体や、団体内部で研修など人材育成に力を注ぐのが難しい団体にとっては、最低限必要な知識や考え方を身につけられるツールだと思いました。

2021.6.27 こども支援ナビ Meetup vol.1
『これから求められる子どもの貧困対策とは？～地域での活動と全国の連携～』
with 一般社団法人 全国子どもの貧困・教育支援団体協議会代表理事
NPO法人 さいたまユースサポートネット代表理事 青砥 恭氏 / LFA代表 李 炯植

2021.7.29 こども支援ナビ Meetup vol.2
『今、子どもたちに求められている居場所とは～居場所づくりの実践事例～』
with 認定NPO法人フリースペースたまらば理事長
フリースペースえん・川崎市子ども夢パーク総合アドバイザー 西野 博之氏
LFA 子ども支援事業部事業部長 入澤 充

2021.8.29 こども支援ナビ Meetup vol.3
『NPOと学校の連携による子ども支援のあり方～Learning for Allの実践事例～』
with 葛飾区立大田中学校 小宮 健 副校長
LFA 子ども支援事業部マネージャー 宇地原 栄斗

2021.11.25 こども支援ナビ Meetup vol.4
『ヤングケアラーが抱える困難と近くにいる大人にできること』
with 一般社団法人ケアラークションネットワーク協会代表理事 持田 恭子氏

2021.11.30 こども支援ナビ Meetup vol.5
『虐待を受けて育つということ～被虐待児の理解と対応～』
with こどもの心のケアハウス 嵐山学園 園長 早川 洋氏

2022.01.26 こども支援ナビ Meetup vol.6
『子どもの権利を保障するために～ビーンズふくしまのアウトリーチ実践～』
with NPO法人ビーンズふくしま
山下 仁子氏/LFA代表 李 炯植

ゴールドマン・サックス

地域協働型子ども包括支援基金

2021年5月、ゴールドマン・サックスからの資金支援をもとに、公益財団法人パブリックリソース財団、LFAが協働し、「ゴールドマン・サックス 地域協働型子ども包括支援基金」を創設しました。

地域で困難を抱えた子どもと早期に出会い・繋がり・支える包括的な体制を構築し、「地域協働型子ども包括支援」を実現することを目的としており、「地域協働型子ども包括支援」の実現に取り組む団体を支援します。



10月20日には、採択結果報告会が行われ、9団体への助成が決定

NPO法人あっとすくーる（大阪府箕面市）
「尼崎市南部地域における地域協働型子育て支援プロジェクト」

NPO法人いるか（福岡県福岡市）
「福岡のこども達を地域で包括的に支える支援体制の構築モデル事業」

NPO法人STORIA（宮城県仙台市）
「支援を必要とする子どもと保護者のための地域包摂事業」

NPO法人ダイバーシティ工房（千葉県市川市）
「子ども達への切れ目ない支援実現のための地域基盤強化事業」

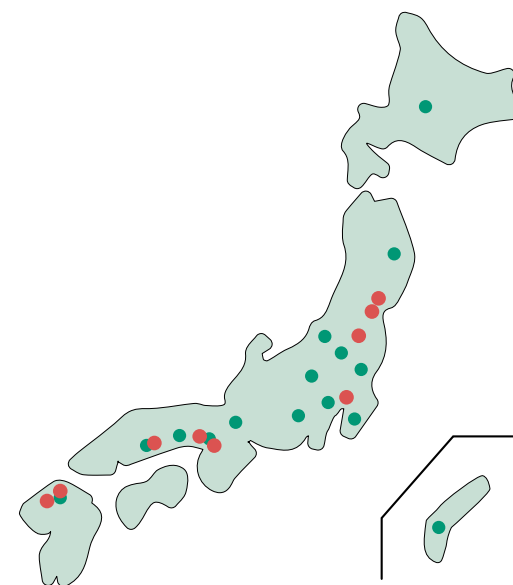
NPO法人ビーンズふくしま（福島県福島市）
「子どもの権利保障」を目的とした自主事業化に向けた基盤整備プロジェクト」

NPO法人アスイク
「宮城県仙台市（拠点に参加できない子どもとつながるためのオンライン支援の構築）」

一般社団法人SGSG（岡山県岡山市）
「経済的困難を抱える中高生のための商店街まるごとおかえりプロジェクト」

NPO法人ケアット（兵庫県神戸市）
「ACT LOCAL KOBE」

NPO法人抱樸（福岡県北九州市）
「地域連携包摂型世帯支援『北九州子ども・家族まるごと支援事業』」



- 全国9団体に助成を実施
- のべ17団体77名に研修を実施

助成先団体へ、LFAが伴走支援を実施

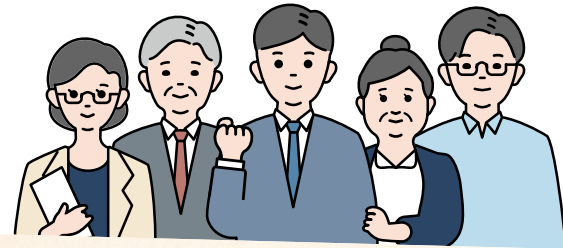
LFAでは、基金の助成先の団体に対して、各団体のニーズに応じたe-learningの提供・現場見学案内・ナレッジ共有を行い、共通施策としてテーマ別の集合研修も実施しました。



・コミュニケーションマネジメント研修 5団体 36名
・ファンドレイズ研修 8団体 26名
・プレゼンテーション研修 4団体 15名

普及啓発 / アドボカシー

LFAは現場での支援活動で得た知見や、全国の子ども支援団体との協働により、課題の普及啓発・人材育成・政策提言に積極的に取り組んでいます。



3月

菅前総理との面談

困窮子育て家庭への支援のための財源確保、困難な子どもをつなぐアウトリーチの強化、地域の担い手育成に関する提言を行いました。

9月

岸田総理(当時・前政調会長)の現場視察

葛飾区中高生学習支援拠点への見学・視察を実施。視察を経て、岸田総理が以下2点に取り組んでいくことに言及。
①「親子サポート・データベース」の構築、②「子どもステーション(居場所)」の設置・全国展開

11月

後藤厚生労働大臣の現場視察

葛飾区中高生居場所支援拠点への見学・視察を実施。
現在概算要求が行われている「子どもの居場所支援モデル事業(仮)」の推進の重要性を伝えました。

内閣府のこども政策の推進に係る有識者会議※にて委員報告実施

「地域協働型子ども包括支援」について、
①要対協会議の運用改善、子ども支援データベースの構築・専門委員の配置
②「居場所」拠点の設置、「学習・生活支援事業」の拡充
③子ども支援を担う専門人材の確保・育成
④継続的な支援体制のための基盤づくりについて提言致しました。

子どもの居場所支援臨時特例事業が令和三年の補正予算で成立

支援を必要とする子どもへの居場所支援が国の予算で事業化されることとなりました。

※こども家庭庁の設置に関わる会議

12月

代表李が全国子どもの貧困・教育支援団体協議会の副代表理事に就任

こどもに関する各種データの連携による支援実証事業の実施が決定

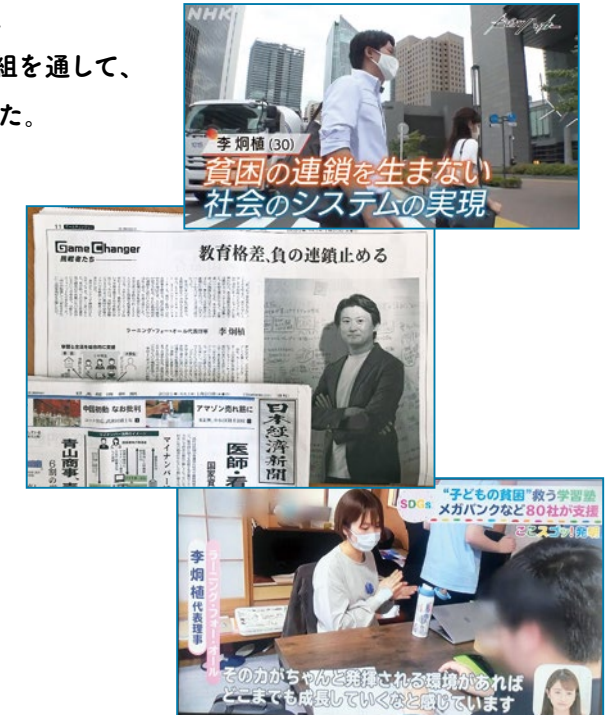
自治体での子どもデータベースを使った支援の実証事業が行われることとなりました。
デジタル庁の資料では事業の先行事例としてLFAの実践が掲載されています。

メディア発信

2021年度は、テレビ6本、web10本、新聞6本、ラジオ1本、雑誌4本、計27本のメディア取材に応じ、それらの記事や番組を通して、子どもたちの現状やLFAの取り組みについて発信いたしました。

時期	種類	媒体
2021年 5月6日	新聞	日本経済新聞
5月16日	テレビ	NHKスペシャル「ビジョンハッカー」
6月10日	テレビ	TBS「あさチャン！」
8月9日	web	ビジネスインサイダー
8月29日	イベント登壇	Forbes×テレ朝イベント代表登壇
10月25日	雑誌	Forbes JAPAN
11月10日	新聞	読売新聞
2022年 1月4日	新聞	朝日新聞
1月11日	テレビ	NHK「おはよう日本」
3月21日	ラジオ	NHKラジオ

2021年度メディア掲載実績(※抜粋)



人材育成



ボランティアの学生



556人の応募の中から、197人の大学生がLFAの研修を受け、学習支援の現場や居場所づくりの現場で、ボランティアとして活躍しました。
卒業した大学生ボランティアの多くは、アラムナイとしてゆるやかに繋がりが、様々な業界から子どもの貧困(社会課題)を解決するリーダーシップを発揮してくれています。

- ・学習支援に参加した大学生数：127人
- ・居場所づくりに参加した大学生数：70人

※2021年度実績



3月に行われた卒業記念イベントでは、LFA職員と双方向で交流の機会もあり、現場での経験をわちあいました。

ひとりひとりに個別の応援メッセージを書いた卒業証書を渡しました。

LFA 代表 さいたまユースサポートネット代表
李 炯植 × **青砥 恭氏**

『子ども支援の未来を描く』

長年にわたり、子どもの貧困対策の最前線で活躍されている青砥恭先生。
 2021年6月に開催した「こども支援ナビ」での Meet up イベントに続き、
 本年次報告書用の特別企画として、
 代表李との対談をお届けします。



青砥 恭氏（写真左）
 一般社団法人 全国子どもの貧困・教育支援団体協議会代表理事
 NPO 法人 さいたまユースサポートネット代表理事
 著書 『日の丸・君が代と子どもたち』（岩波書店）/
 『ドキュメント高校中退』（筑摩書店）/
 『若者の貧困・居場所・セカンドチャンス』（編著 太郎次郎社エディタス）など

—青砥先生より、自己紹介をお願いします

青砥 僕は1948年生まれ、団塊の世代。島根県の松江出身です。高校の教員になったのが1983年。富裕層の子どもが来る学校には勤めたことがなくて、色んな子どもたちと出会いました。10代からホームレス、親がいない、虐待を受けていた子など、孤立無援で学校経験がない子どもたちにも、数多く出会ってきました。一方で地域の自治会の役員もして、そうした地域づくりを20代後半から40代ぐらいまでやっていました。格差の問題というのは深刻だという認識を高校教員時代から持っていたので、その後大学で教えるようになって、子どもたちの居場所として『さいたまユースサポートネット（※1）』を立ち上げました。

—青砥先生与李さんとの出会いは

李 僕がまだ東大の学生で、ボランティアスタッフをしていた頃に、教員研修があったんです。そこで先生が、講師としていらしていて。

青砥 そうそう、背の高い人が出てきたと思いました。

李 その後、2015年に協議会（※2）を立ち上げる際に、一緒に僕も役員に入れていただいたのが最初。そこからはもう、本当に色々教えていただいて。今のLFAのビジョンなどは、実は青砥先生と会ってお話しするたびにアップデートしてきたようなところがあります。

—今の「子ども支援」の在り方について、課題は

青砥 ひと言で「子ども支援」といっても、一

つの課題を支援することで解決する話ではない、ということですね。勉強を教えるだけでは足りない。日常生活も支えなければいけない。ご飯も食べて、それから宿題をして、親の支援もしなければいけない。障害があれば、それを支える仕組みをつくらなくちゃいけない。卒業したら、仕事をどこかで繋いであげないといけない。ヤングケアラーの問題というのも非常に古い問題で、一人の子どもだけを支えることが子ども支援ではない。やればやるほどそれが見えてくるので、支援者側も苦しむ、疲れ果てる。それがね、非常に最近重い。

李 子どもの貧困という言葉は2008年頃から注目されて14年経って、子どもの貧困対策法や、生活困窮者自立支援法、そこに紐付く学習支援事業や子ども食堂の設立など、課題認識も深まったし活動も広がってきたと思いますが、僕もやればやるほど子どもたちの課題の複雑さ、社会課題というものの複雑さに悩んでいて。一方で、支援のメニューが包括的であるということや、複数の専門性を持って接していくということが、僕たち支援団体のやるべきことだという風に、理解は深まってきています。

そうしたマルチな専門性を持って子ども支援にあたるということは、必要性が高いけれども難しいところでもあり、僕たちも日々努力して研鑽しているところです。

青砥 もう一つの課題は、やはり自治体の主導が非常に弱いということです。お金を出して、時々我々の意見を聞いてそれで終わり、その後は民間に委託ですよ。民間委託が進めば、一方で市場化が進むわけです。企業がお金を求めて参入してくる。一つの市場ができるんですね、それで競争が始まる。格差が生まれて、生

き残らなかったNPOは潰れていく。そんな中で、僕らNPOはどうやってこの事業が、より子どもたちの支えになるのか、届くのかということをやっていかなくちゃいけない、調査をしたり、色んなことをしながら。

やはり、一番大事なものは地域の協働です。地域にしっかりと繋がった社会的活動をどうやるかということ僕らは目指す。それが一つ。その時に、自治体はもっと、コミュニティ政策として10年後にどういう地域社会にするのかということを考えて、地域の子どもたちを守ろうとして頑張ってる団体を支えてほしい。残念だけれども今のところ、まだそういう動きは非常に弱いです。地域の色んな方々とやはり地域のソーシャルキャピタル（※3）を育てること、それを積み上げることですね、それが今一番僕は大事だと思っています。

—NPOならではの強みとは

李 そうですね、ソーシャルキャピタルの話がたぶん一番重要だと思うんですけど。他で言うと、支援の文脈で言うやっぱりNPOは、行政ではないというところの強みがあると思います。行政だと、この仕様やこのルールに沿ったこういう人をこう支援するということ、限られたターゲットに線引きをして支援をするということ、彼らの役割だし求められていること。税金でやることには、公平性が求められますから。で

もNPOの場合は、その線引きが曖昧でいられる。経済的に困窮している子たちだけで線引きをしなくても、何かしらの生きづらさがある子たちを受け入れる拠点をつくれるというのは僕たちの強みです。

これは、なぜ皆さんからの寄付が必要かという話にも繋がるのですが、そういうまだ法律や制度で担保されてない、何かしら思いがないと救えない子どもたちの権利やニーズに応える時に、やはり「自主事業」としてやるしかない。原資がないので、皆さんからの寄付があつてはじめて、そうした新しい試みができるんです。そこでのトライアルから、エビデンスを作って、国全体への制度化や、政策提言に繋げていける。それを続けて、制度・政策づくりに繋げていくというのは、まさに先生もやられていることで、僕も取り組んでいることです。

—5年後の「子ども支援」の姿とは？



青砥 もっと学校がちゃんと機能すべきだというのが一つですね。学校はやはり、最大の社会資源。学校が変わるためには、地域と繋がること。地域の実態や、子どもの背後の実態を、学校はもっと知らなくちゃいけない。けれど、今うちの団体にも学校の先生出身が何人もいますが、なんで辞めたのかって、教師をして疲れたのです。朝7時に学校に行って夜の10時11時まで残業手当もなしに仕事をしている。その現実の中で、先生たちにもっと働けとは、僕は言えない。だから、教員の数を増やすしかないですよ。未来への投資というのであれば、もっとそこに予算を使ってね。そこで子どもたちのために学校が本来の機能を果たすということじゃないかな。1950～60年代なんかは、地域と学校は地域の子どもを守る機関であった時代も一時期あったんです。だから決して、不可能ではない。

李 もう今、人口減少がすごいじゃないですか。
青砥 うん、2021年には出生数は80万人。
李 資源のないこの国は、やっぱり人を大切に

願うのは、まさに先生が仰ったように、予算が増えること。そして委託も含めて、民間の子ども支援者たちが良い待遇で、しっかりした専門性が認められて働けるようになること。教員も、ソーシャルワーカーもそうですが、今の養成課程だけでは現実に対応できていないはずなので、そうした専門家の養成というのを、座学だけでなく実地も含めてきちんとしていってほしい。ソーシャルワークの大学院などは、海外には沢山あるし、そういう方が修士号を取って現場に行くような。それぐらいやはり、日本の中でも専門的な職種として認められるべきだと思っています。

—何か活動したいと思っている個人の方へ、ひと言

青砥 そうですね。例えば、身近で開催されているささやかな地域づくりの活動に、休日の1時間ぐらい参加してみようとか、そこに来てる子どもたちに、ちょっと勉強教えようとか、一緒に遊ぼうとか。自分の身の回りでそういう活動してる団体が沢山あるので、そこに参加して欲しい。それが日常のライフスタイルになるといい。例えば普段は会社に行く、だけど2週間に一度は自分の子どもを連れて、地域の活動に参加する。そうしたゆとりある生き方がみんなの日常になるような、そんな社会になるといいな。

李 僕も全く同じ事を思っていました。自分の思ってる以上に僕らは繋がって生きてるというか、自分の利害とか損得の外にある関係性にもうちよっとちゃんと目を向けるべきだし、社会の持続性に目を向けるべきだし。そういうあり方じゃない限り、現代社会は続いていかないというのは明らかなので、そこにどれだけ本当に関わってもらえるか、当事者意識を持って関われるか。地域の子ども食堂とか子どもの学習支援などに関わる、子どものNPOに関わることもそうだし、そうでなくてもそのNPOに寄付するとか、企業の中のCSR活動の中で何かやってみるとか、実は目を向けるとたくさん選択肢があるはずなので、何か一歩踏み出して欲しいですね。

青砥 僕は地域づくりとか何かって、理屈っぽく言うんですけど、結局なんでこんなことやってきたかって「面白い」からなんですよ。地域のお祭りとか作るわけですよ、子どもたちと一緒に。面白いじゃないですか。結構教員になった後も地域の人達とお祭りに行ったり、終わった後飲みじゃないですか、お酒好きだったからね。当時は、もう自分よりも何十も年上の、それこそ50歳近い人もいたし、その人達とおしゃべりしたり、それがやっぱり楽しいわけですよ。自分の子どもが生まれたら生まれたで、一緒に遊びま

すし。やっぱりそれはね、面白いんですよ、生きがいにもなる。だからちっとも苦しくない、友達ができるわけですから。李さんのような、とっても若い友達もできる。

だから、教師で終わるより、ここのNPOで色々な苦労はあるけれども、社会に対してはそれなりの役割も果たせたかなと思っています。

李 そうですね。こういう活動に参画する時に、問題解決をしたいという強い目的で入ってもいいんですけど、要は余暇なんですよ、余暇でいい。余暇が充実してる方が人生楽しいですから。僕も最近になって、そう思えるようになったんです。本当に最近です、気張ってたんですよ。団体のみんなも頑張ってくれてるし。わりと楽しくなりましたね。子どもがいてもいなくても関係なく、子どもや社会に関心のある人の集まりですから、そういう人達と交流することが面白いし、発見があるじゃないですか。その一個一個が面白いなと思います。



皆さんには、目の前の社会問題を解決していくために、自分たちが何ができるかをもっとみんなで考えて、そういうことをNPOと一緒に共創していく。共に創っていくようなそういう関係性として、僕たちと一緒に問題解決をしていく仲間になってもらえるとありがたいなと思います。

本対談は、90分にわたる対談の抜粋となっております。全文は、後日LFAのサイトに公開予定です。お知らせをお待ちください。

- ※1 2011年より青砥氏が代表を勤めるNPO。さいたま市を拠点に、様々な困難により居場所がなく将来への不安を抱えた子ども・若者たちへの支援活動を展開している。
- ※2 一般社団法人 全国子どもの貧困・教育支援団体協議会
- ※3 人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴

SUPPORTERS

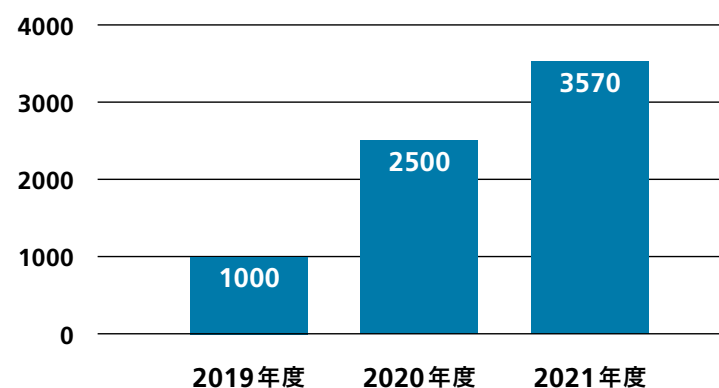
2021年度は、3500名を超える個人サポーター様と、
100社近い企業/団体様に様々な形でご支援いただき、
活動することができました。

個人サポーターの皆さま

2021年度も多くの新規サポーターの方に
LFAの活動に関心をお寄せいただき、
3570人※の個人サポーターの方にご支
援をいただきました。
これは昨年の約1.4倍となっています。

※2022年度3月末時点

年間個人サポーター数



個人サポーター の声



学生時代にボランティアとして参
加し、私自身「自分にもできること
があるんだ」という気づきをもらっ
たので、今も僅かながら支援続け
ています。人が心穏やかに生きら
れる社会にするために、できること
をしていきたいなと思っています。



私自身、とある島嶼部出身で片
親の極貧状態の生い立ちでしたが、
ちょっとした心を拓くきっかけ
でも子どもは大きく変わり、心の
成長が加速します。今後更にその
きっかけ作りのスケールを広げて
いただきたく、引き続きサポートし
ていきたいと思っています。



コミュニティ推進事業部事業部長
石神 駿一

日頃よりあたたかなご支援をいただき、誠にありがと
うございます。

寄付という形で想いを託してくださった方、LFAの活
動を広げるお手伝いをしてくださった方、社内勉強会
の開催や、子ども食堂への食料・物品提供、LFA職
員への研修提供をいただいた企業など、今年度も皆
さまから様々な形での応援をいただきました。

LFAのスタッフだけが頑張っている、子どもの貧困
の本質的な解決は出来ません。子どもの貧困問題の
解決を願い、共に戦ってくれる仲間が必要です。

子どもの貧困を他人ごとから「自分ごと」に。そして、「世
の中ごと」に。

これからも一緒に戦ってくれる仲間を増やしていき
たいと思います。

サポーター企業/団体の皆さま

下記をはじめとする企業様・団体様より、
寄付・助成金をいただき
活動させていただきました。



LFA コミュニティ

「LFA大感謝祭」に、
過去最多200名の方が参加！

2021年10月、今年も日頃LFAを応援してくださる皆さまを
ご招待した「大感謝祭」をオンラインにて開催。

当日は、日頃から活動をご支援いただいているサポーターの
方、テレビや新聞などを見てLFAの活動にご関心を寄せてい
ただいた方、大学生時代にボランティアとして活動したアラ
ムナイ(卒業生)など、過去最多となる総勢約200名の方にご
参加いただきました。

イベントでは、1年の活動の成果をお伝えし、代表の李からも、
活動開始から現在に至るまでの歩み、そして今後の挑戦につい
ても、活動にかける想いを交えながらお話しさせていただきました。

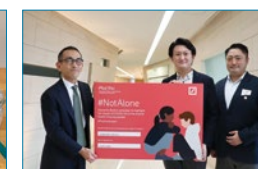
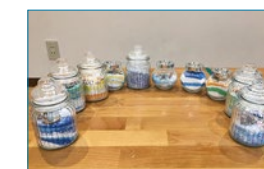
拠点の子どもたちの様子
がわかる動画を流す初の
試みを行い、参加者の皆
さまからは、数々のあた
たかい激励の言葉をいた
だきました。

参加者の皆さまから
いただいた激励メッセージ



～サポーター企業の皆様と～

金銭的な寄付だけでなく、子どもたちとの体験活動
を企画いただいたり、独自の企画でのファンドレイ
ジングなど、様々な形でご協力をいただきました。



年間18回の活動説明会を実施、
のべ475名が参加

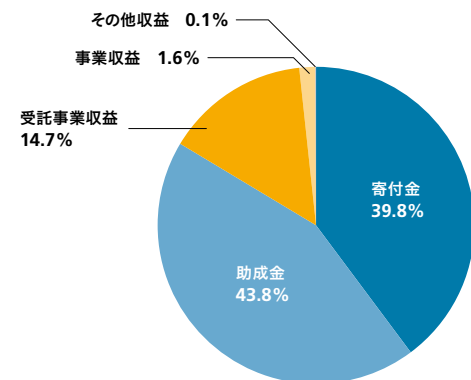
子どもの貧困やLFAについてご関心をお持ちの皆
さまに、子どもたちの現状や活動内容を知ってい
ただくための説明会を年間18回開催し、のべ475
名もの方にご参加いただきました。

参加者の皆さまからは「子どもはどのように支援に
つながるのか?」「コロナ禍で子どもの置かれる状
況に変化はあったか?」など、熱心に質問をいた
だき、どの回も活気のあるイベントとなりました。

収支報告

収入

	科目	全額（単位：円）
収支	寄付金	156,530,789
	助成金（助成団体・企業からの助成金）	172,546,367
	受託事業収益	57,797,991
	事業収益（啓発事業収入）	6,416,044
	その他収益（雑収入等）	480,589
	合計	393,771,780



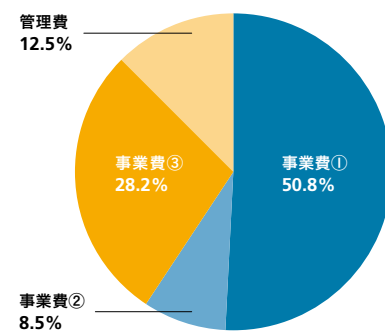
2021年度の経常収入は、コロナ禍において懸念されていた寄付金等の大幅な減少はなく、前年度比16%増の3.9億円となりました。

自治体等からの現場運営の委託事業収益は昨年度と同程度となっていますが、特に、個人サポーター様・企業サポーター様からのご寄付は前年度比36%増、1.5億円にも達しました。そのため、コロナ禍で刻一刻と変化する子どもの状況に応じた柔軟な支援や、拡大する組織における管理機能の強化を進めることができました。

2022年度においては、今年度とほぼ同程度の収入を見込んでおりますが、そのうち最も多く、約5割を占めている助成金は期限付きのものとなっています。現在いただいている助成金のうち、3千万円近くは2022年度までのご支援となっております。引き続きさらなる資金調達が必要な状況です。

支出

	科目	全額（単位：円）
支出	事業費 ①一人に寄り添う（現場支援）	195,365,697
	事業費 ②仕組みを広げる（ナレッジ展開）	32,758,524
	事業費 ③社会を動かす（普及啓発）	108,513,604
	管理費	47,932,973
	合計	384,570,798



LFAは、3つのアプローチに基づいて事業を行っています。

①「一人に寄り添う」活動として、子どもへの直接支援（居場所づくり、学習支援、食事支援、保護者支援、訪問支援など）、②「仕組みを広げる」活動として、ノウハウ展開やナレッジサイトの運営、③「社会を動かす」活動として、メディアを通じた課題の普及啓発活動や人材育成、政策提言活動など。

支出の内訳に関しては、約5割を①の子どもへの直接支援にかかる人件費・経費にあてています。②仕組みを広げる③社会を動かす活動には合わせて約37%をあてており、年々活動を強化しています。

管理費にかかる割合はおおよそ13%程度となっています。

団体概要

設立	2014年7月23日
所在地	東京都新宿区新宿5丁目1-1 ローヤルマンションビル404
従業員数	職員44名、業務委託15名、インターン31名 （※2022年6月1日時点）
事業内容	私たちは、「子どもの貧困」を本質的に解決するために、下記の3つの事業に取り組んでいます。

1〈一人に寄り添う〉

困難を抱える6～18歳の子どもが自立するまでを、早期から切れ目なくサポートする、居場所づくり・学習支援・食事支援・保護者支援・訪問支援などを通した「地域協働型子ども包括支援」の実践。

2〈仕組みを広げる〉

「地域協働型子ども包括支援」の全国展開を目指した、ノウハウ提供・共有プラットフォームの運営。

3〈社会を動かす〉

現場での支援活動や全国の子ども支援団体とのネットワークづくりを通じた、普及啓発・人材育成・アドボカシー活動。

沿革

- 2010** 学習支援事業を開始
（現 認定NPO法人 Teach For Japan 内の一事業として）
- 2011** 東京都北区における学習支援事業が「北区改革プランベスト1」を受賞
- 2014** NPO法人 Learning for All を設立
- 2016**
 - 居場所づくり事業を開始
（日本財団の子どもの貧困対策プロジェクト第1号拠点として）
 - 食事支援・保護者支援・普及啓発活動を開始
 - 代表 李が「全国子どもの貧困・教育支援団体協議会」の理事に選出
- 2018**
 - 6～18歳まで切れ目なく支援する「地域協働型子ども包括支援」モデル構築に着手
 - 第5回エクセレントNPO大賞および課題解決力賞を受賞
 - 代表 李がForbes「30 UNDER 30 JAPAN 2018」に選出
 - LFAの知見を他団体へ共有するノウハウ展開事業を開始
- 2019** 中高生向けの居場所づくり事業を開始
- 2020** コロナ禍における支援家庭を対象にしたニーズ把握調査を開始・発表
- 2021**
 - 全国の子ども支援者同士でノウハウを共有できるプラットフォーム『こども支援ナビ』の運用を開始
 - 「地域協働型子ども包括支援」を全国に広げる「地域協働型子ども包括支援基金」を立ち上げ。全国9団体に助成を行い、のべ17団体に研修を実施。
 - 「NHKスペシャル」にて代表李の特集が放映
 - 代表 李が内閣府「こども政策推進に係る有識者会議」に、臨時構成員として参加
 - 東京大学大学院教育学研究科と教育・研究交流連携事業に関する協定を締結
- 2022** 立ち上げからのべ10,500名以上の子どもに支援を提供（2022年3月末時点）

役員紹介



代表理事 | 李炯植
1990年、兵庫県生まれ。東京大学教育学部卒業。東京大学大学院教育学研究科修了。2014年に特定非営利活動法人 Learning for All を設立、同法人代表理事に就任。これまでにのべ10,500人以上の困難を抱えた子どもへの無償の学習支援や居場所支援を行っている。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会 副代表理事。2018年「Forbes JAPAN 30 under 30」に選出。



理事 | 熊平美香
昭和女子大学キャリアカレッジ学院長 ハーバード経営大学院経営学修士課程修了



理事 | 大越一樹
ペイン・アンド・カンパニー・ジャパン パートナー フランスHEC経営大学院経営学修士課程修了



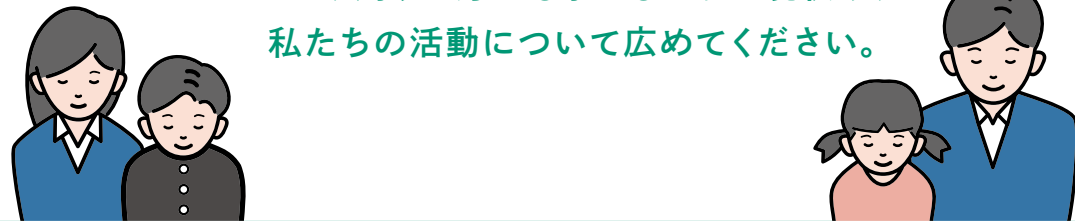
理事 | 鈴木栄
一般社団法人 ソーシャル・インベストメント・パートナーズ 代表理事 一般社団法人 ジャパン・フィランソロビック・アドバイザー 代表理事 California Institute of Technology 物理化学博士号修得

監事 | 渡辺伸行
TMI総合法律事務所 パートナー 早稲田大学法学部卒業 ニューヨーク大学ロースクール卒業

あたたかい応援をいただき、心より感謝申し上げます。

困難な状況に置かれた子どもたちを継続的に支えるため、
今後も一人でも多くの皆さまからのご支援が必要です。

ぜひ、周りの方にも子どもたちの現状や、
私たちの活動について広めてください。



各種SNS・メルマガに登録する

LFAでは、子どもの貧困について理解が深まる記事や、支援の現場からの活動レポートなどをSNSやメールマガジンにて随時お届けしています。

ぜひフォローして、いいね！やシェアで、子どもたちの現状をもっと知り、広めていただけないでしょうか。



活動説明会に参加する

子どもの貧困やLFAについてご関心をお持ちの皆さまに、LFAのスタッフによる無料の説明会を行っています。説明会の前半ではLFAの活動をより深く知っていただき、後半では交流の場も設けています。ぜひ、ご友人や職場の方、ご家族などお問い合わせの上お気軽にご参加ください。

※現在、オンラインで開催中です。



▲お問合せはこちら



グッズで応援する

子どもたちのアイデアで生まれたカレンダーや、活動にご賛同いただいた地域の企業様との共同制作による鉛筆など、オリジナルのグッズを販売しています。

利益は全額、子どもたちの支援に使われます。

ご友人やご家族にプレゼントすれば、「子どもの貧困」やLFAについてお話いただくきっかけにも。



▲ショップはこちら



企業向け研修会を開く

企業にお勤めの方向けに、社内研修を提供しています。「子どもの貧困」を通じて、社会課題について理解し、課題解決の当事者となっていただけのようなプログラムを提供いたします。

ニーズによってカスタマイズすることが可能です。

新入社員教育だけでなく、SDGs施策の一環としても、人事/CSR/サステナビリティ推進等のご担当者様にご好評いただいております。

※オンラインでの開催も可能です。



▲詳しくはこちら



編集後記

子ども支援事業部からコミュニティ推進事業部に異動して1年。初めて担当した年次報告書。なんとか入稿にたどり着いた今の気持ちは・・・「できる限りのことはやった！！」でももっと多面的に、LFAが取り組んでいることや子どもたちへの想いを届けることはできるはず。来年の年次報告書制作が早く来ないかな！」です。

“大変だなあ”と思われがちなお仕事ですが、日々友達とじゃれあい、うーんとしかめ面で苦手なことにも立ち向かって、確実に“大きく”なっていく。これまでの現場経験で感じた彼らの強さや可能性の輝きを、もっと魅力的にお伝えしたい。そんな想いで、これからも精進して参ります。

昨年度のLFAは、現場における支援だけでなく、子ども支援者の輪が広がり、政策としても「子どもの貧困」解決に向けた活動の必要性が認められるなど、目まぐるしい1年となりました。1年の総まとめであるこの報告書の制作を通して、改めて支えてくださっているみなさまの存在の大きさを感しました。心から、本当に心から感謝申し上げます。

今年度は、活動だけではなく、LFAが考えていること、感じていることも少しずつ発信していきたいと思っています。

2022年を「LFAメディア元年」と名付けます。(勝手に)どうぞご期待ください！！

引き続き、課題解決の仲間として、どうぞよろしくお願いいたします。

コミュニティ推進事業部
岸本 尚子

つかしこまりがちな年次報告書。もっと現場の子どもたちや職員の素顔を届けたい！というメンバーの想いと、毎年デザインを手掛けてくださる内山さんのご協力にて、今回の大幅アップデートが実現しました。個人的には、NPOでの活動を「面白い」からやっているという青砥先生の言葉に、とても背中を押された気持ちでした。深刻な状況の子どもたちを日々支援し、様々な苦労もある中で、そのように明るく語る先生。直接お話を伺う貴重な機会をいただいたこと、心より感謝いたします。対談収録後の食事にて、昨年生まれた娘の話をする代表李が、見たことのないユルユルな笑顔をしていたのも印象的でした。

私自身、8歳になった娘の成長速度に圧倒される日々。求められる変顔や、一発ギャグのバリエーションも尽きてきました。冗談はさておき痛切に感じていることは、拠点に通う子どもたちや、保護者の皆さまが抱える困難は、何一つとして他人事ではないということです。同じ時代を生活している子どもたちの「今」を、みんなでなんとかしなくちゃ。という想いを新たにしています。これからも、どうぞ皆さまのお力を貸してください。

コミュニティ推進事業部
飯田 依里子

2021年度の年次報告書を読んで頂きありがとうございます。

皆さまにとって2021年度はどんな1年でしたでしょうか？私生活では結婚式のために13kg痩せた体が速攻でリバウンドするなど、心も血圧も忙しい1年でした。LFAでは、長引くコロナによる子どもたちへの影響が様々な側面で顕著になる中、全力で走り続けた1年でした。目の前の子どもたちに向き合いつつ、「地域協働型子ども包括支援」の全国展開や政策提言を進めて参りました。コロナのような状況下でも、LFAが活動を継続できているのは、ご支援いただいている皆さまのおかげでございませう。どれだけツライ時でも踏ん張れるのは皆さまの「想い」を受け取って我々が活動しているからです。自分たちには3,500名を超える仲間がいるんだ、そう思えたら自然と力がみなぎって力強く一歩を踏み出すことができました。私だけでなく、職員全員が同じ想いだと思っています。改めて感謝申し上げます。年に一度の貴重な機会に、応援していただいた全ての方に何を伝えるべきだろうかと。改めてそのことと向き合いながら、年次報告書を大幅にリニューアルさせて頂きました。少しでも現場の様子が伝わるような構成、デザインを意識いたしました。皆さまの「想い」がどのような形で子どもたちに届いているか、「子どもの貧困」の本質的な解決につながっているか、感じ取っていただけたら幸いです。いつも支えていただきありがとうございます。引き続き私たちの仲間であって頂けると嬉しく思います。

コミュニティ推進事業部長
石神 駿一

【デザイン】内山耀一朗 【イラスト】長濱啓輔、内山耀一朗

ご意見・ご感想

当年次報告書をお読みいただいた感想やLFAへのご意見を、是非お聞かせください。

下記の専用フォームやメールアドレスより、ご投稿いただけます。

年次報告書 ご感想専用フォーム：<https://forms.gle/dB1mm8Quzr1ppvnSA>

メールアドレス：lfa-community@learningforall.or.jp

